

【審査論文】

**ポピュリズムの特徴・固有性・問題について：
「シンドローム」としてのポピュリズム**

金丸裕志

Populism as a “Syndrome”: Its Characteristics, Peculiarity and Problems

KANAMARU Yuji

要旨

本稿では近年盛んに議論されている「ポピュリズム」について論じる。最初にポピュリズムを定義することの困難さを指摘し、ポピュリズムを「シンドローム」と捉えることでいくつかの特徴を列挙した。それを踏まえて次に、それらの特徴はすべてのポピュリズム現象が持っているものでもなければ、一つ一つの点を取り上げてそれがポピュリズムのみに固有なものではないということを指摘した。そして最後に、これらのポピュリズムの諸特徴と重なる政治学の諸論点からポピュリズムの何が「問題」なのかを指摘し、様々に論じられているポピュリズムの「問題」について論点を整理して論じることの重要性を指摘した。

キーワード：ポピュリズム、(自由)民主主義、個人政党、政党組織の制度化、大統領制化

はじめに—ポピュリズムと民主主義

この数年間に日本語で出版されたものだけみても、「ポピュリズム」と題するものは文字どおり枚挙にいとまがない。学界においても、たとえば日本政治学会では2017年度全国大会での共通論題が「ポピュリズムの政治分析」であったし、同大会では「ポピュリズムと欧州政治の動態」と副題を持つ分科会も開かれている。また日本比較政治学会でも、2020年度全国大会では自由論題として『『ポピュリスト』政治指導者と民主主義の行方』、2019年度は分科会で「ポピュリズムの現在と政治制度への影響」、2018年度も分科会で「東欧と西欧におけるポピュリスト（急進）右翼政党」および「ポピュリズムの諸相」が設けられている。

こうしたポピュリズムの「大流行」は、民主化の時代から権威主義の時代への変化を背景に（金丸2019）、近年における「民主主義の危機」と重ね合わせて論じられることも多い。その典型が、ヤシャ・モンクによる次の言及であろう。「私たちがポピュリズムの台頭（ポピュリスト・ムーメント）を目の当たりにしているということは間違いない。問われるのは、このポピュリスト・ムーメントが、いつポピュリストの時代（ポピュリスト・エイジ）へと転換するのか、つまりリベラル・デモクラシーの生存が脅かされるようになるか、だ」（モンク2019：3、強調は筆者）。

しかしここで悩ましい問題もある。ポピュリズムが、その出自を、アメリカにおける「人民党」の出現に持ち、またあくまでも「人々の」支持に基づく政治運動である以上、それは必ずしも「民主主義」とは

背反しないからだ。ゆえに、「ポピュリズムをめぐるポジとネガのイメージがない交ぜになった・・・『ねじれ』」（吉田2011：9）がつきまとうことになる。

果たして、ポピュリズムは民主主義にとって害悪なのだろうか？そしてポピュリズムが民主主義にとって「害悪」とであるとすれば、それはいかなる点でそうなのだろうか？そしてそもそもポピュリズムとは何であると定義することができるのであろうか？本稿では、まず先行研究のなかでポピュリズムがどのように定義されてきたのかを検討しその定義することの困難さを指摘する。その上で、ポピュリズムの特徴として挙げられるものを抽出し、それらの特徴がポピュリズムのどの事例にも共通してみられるものではないこと、そしてポピュリズムにのみ固有のものではないことを指摘する。そして最後に、これらのポピュリズムの諸特徴と重なる政治学の諸論点から、ポピュリズムの何が「問題」なのかを指摘し、昨今様々に論じられているポピュリズムの「問題」について論点を整理して論じることの重要性を指摘する。

1. 「シンドローム」としてのポピュリズム：ポピュリズムの諸特徴

ポピュリズムの「定義」の困難さ：「シンドローム」としてのポピュリズム

ポピュリズムが民主主義と背反するのか否か、つまり現代の民主主義にとってポピュリズムは害悪なのか否かという問題と同時に、ポピュリズムを論じるにあたってもう一つ困難な問題がある。それは、この「ポピュリズム」というものを「定義」するのがひじょうに難しいということだ。例えば日本においてかなり早い段階でポピュリズム研究の重要な業績を残した吉田徹は、『ポピュリズム』や『ポピュリスト』という言葉が一般的に何を意味しているのかについて答えるのは簡単ではない。それだけ、ポピュリストという現象を分析するのは難しいのである」（吉田2011：14）と述べている。また、ポピュリズム研究で必ず言及される研究のなかでポール・タッグートは、バーリンがポピュリズムを「シンデレラ・コンプレックス」と呼んだことを紹介し、「ポピュリズムとは、難しくつかみにくい概念である」（Taggart 2000：2）と書いているし、最近の日本の研究でも古賀光生は、『ポピュリズム』についての厳密な定義は、未だ、研究者の間でも共有されていない」（古賀2020：3-4）と断言している。

それではどうして「ポピュリズム」の定義は困難なのか？筆者は、ポピュリズムの定義に付随するさまざまな要素や特徴について、それらのなかでポピュリズムにしかない諸要素を挙げるのが困難である一方、逆にあらゆるポピュリズム現象を完全に包括する諸要素を挙げることも困難であるということから、このポピュリズムの定義の困難さがきているのではないかと考える。実際、ポピュリズムという概念は、現実の「政治現象」から帰納的に取り出されたものであり、よって政治学の「分析概念」として理論的に定位することはもちろん、その構成要素を過不足なく抽出することはほぼ不可能なのだ。

したがってそれは、分析概念ではなく現象を表すものとして、さまざまな要素を備えた「シンドローム（症候群）」として捉えた方がいいのではないかと考える¹。よって本稿ではまず、「ポピュリズム」を「定義」するのではなく、それを「シンドローム」として捉え、そこに備わるいくつかの「特徴」を列挙していくことにしたい。その際に列挙されるポピュリズムの諸特徴は、その多くに共通してみられるものもあるだろうが、なかにはその一部の要素が欠けているものもあるだろう。それらを厳密に「ポピュリズムではない」というのではなく、「ポピュリズム」という現象の多くに共通して見いだされる諸特徴を列挙することにより、今日さかんにポピュリズムと呼ばれているものの概念を析出するという作業が有用であると考える。

そこで、これまでの主要なポピュリズム研究を踏まえて本稿では、ポピュリズムの特徴として次の諸点を挙げることにする。まずポピュリズムの「支持調達の手法」として『人々』をその中心に据えていること

と『敵／味方』の二分による対立の強調」という特徴。次に、「イデオロギー・理念」として「イデオロギー（理念）の多様性・希薄さ・空虚さ」。そして最後に、「指導者と支持者の関係」として、「カリスマ的政治指導者の存在」、「政治指導者と『人々』との直接的つながり」という特徴である。以下、これらの諸特徴について順にみていくことにする。

支持調達の手法

まず「支持調達の手法」として第一に「『人々』をその中心に据えていること」について。「ポピュリズムは、その語源からも明らかなように「人々（people）」を中心に据えている。例えば、『オックスフォード政治学小辞典』では、「ポピュリズム」を「普通の人々の選好を支持すること」と定義している。また、水島治郎は『ポピュリストとは何か』で、「人民（people）に依拠してエリート支配を批判する政治運動が、それ以後ポピュリズムと呼ばれるようになる」（水島2016:30）と書いている。そもそも「ポピュリズム」の語源が、「人々=People」から来ているように、人々の意思を実現する政治にこそポピュリズムの真骨頂があり、ポピュリズムの政治指導者は、まさに自分（たち）こそが、「人々」の意思を体現するものだと主張することで、その政治的な支持を調達しようとする。

さらに、ポピュリストは「人々」の意思を体現する一方で、その「人々」の「敵」であるものに対峙しているという「敵／味方」の二分法ないし二項対立で政治対立の図式を描き出すことでその支持を強化するという特徴がある。例えば、近年のポピュリズム研究で必ず参照されるミュデとカルトワッセルは、ポピュリズムを「社会が究極的に「汚れなき人民」対「腐敗したエリート」という敵対する二つの同質的な陣営に分かれると考え、政治とは人民の一般意志（ヴォロンテ・ジェネラル）の表現であるべきだと論じる、中心の薄弱なイデオロギー」（ミュデ、カルトワッセル2018:14、強調は原文）と定義する。ここに、現代ポピュリズムの支持調達の手法としての「『人々』を中心に据えていること」、そして『敵／味方』の二分による対立の強調」が明確に述べられている。

また吉田は、ポピュリズムは「『敵』を見つけ出し、これを非難することで求心力を高めようとする政治戦略」（吉田2011:52）であるとし、「われわれ=人々」に対し「敵」に対置する二分法を特徴として挙げている。さらに小泉元首相の政治手法に「日本型ポピュリズム」を見いだした大嶽秀夫は、「ポピュリズムとは、『普通の人々』と『エリート』、『善玉』と『悪玉』、『味方』と『敵』の二元論を前提として、リーダーが、『普通の人々』の一員であることを強調する（自らをpeopleにアイデンティファイする）と同時に、『普通の人々』の側に立って彼らをリードし、『敵』に向かって戦いを挑む『ヒーロー』の役割を演じてみせる、『劇場型』政治スタイルである」（大嶽2003:118-119）と述べ、「普通の人々とエリート」、「善玉と悪玉」、「味方と敵」の二元論がポピュリズムの前提となっていることを指摘している。

イデオロギー・理念

次に、ポピュリズムの「イデオロギーや理念」ないし主張の特徴として、その多様性ないしは空虚さといった点を挙げたい。ポピュリズムという概念のつかみ所のなさについて論じたラクラウの『ポピュリズムの理性』では、ポピュリズムにおいて「人々」という言葉が指し示す内容すなわち「シニフィアン」が「空虚」であることを指摘している。もっとも、様々なポピュリズム現象においてポピュリスト指導者がいう「人々」が具体的には誰であるのかは時と場合によって異なり、「空虚」というより正確には「多様」であるといえよう。前述の引用でもミュデとカルトワッセルは、ポピュリズムが「中心の薄弱なイデオロギー（thin-centered ideology）」しか持たないと述べていた。

これに準じて古賀光生は「ミュデの『薄いイデオロギー』としてのポピュリズムの定義は、ポピュリスト勢力の主張の多様性を反映したものである」（古賀2020:7、強調は筆者）と述べている。実際、ポピュリストの主張するイデオロギーや理念は、その国や地域が抱えている問題によって異なる。ミュデらが指摘しているように、「ヨーロッパの文脈においては反移民や外国人嫌悪（ゼノフォビア）のことを指してポピュリズムと呼ぶことがあるが、ラテンアメリカではクライエントリズム（恩顧・庇護関係）や経済政策の失敗のことを遠回しに言っている場合が多い」（ミュデ、カルトワッセル2018:9）といった、国や地域による主張の多様性がみられるのである。

指導者と支持者の関係

第三に「指導者と支持者」との関係にみられる特徴を挙げたい。まずその特徴としてしばしば挙げられるのが、「カリスマ的指導者の存在」である。それは先にみた吉田の「国民に訴えるレトリックを駆使して変革を追い求めるカリスマ的な政治スタイル」（吉田2011:14）という定義にも明確に現れている。またタッグアートは、多くのポピュリズムのリーダーシップはカリスマ的であると指摘し、アルゼンチンのペロン、アメリカのアーバート、そしてフランスのルペンをもポピュリズムの代表的なカリスマ指導者として挙げている（Taggart 2000:101）。さらに彼は、ポピュリズムにおけるカリスマ的指導者の存在は、前述のイデオロギーや理念の「空虚さ」とも関係していると指摘する。すなわち、「ポピュリズムの中心が空虚であること、つまりその中心となる価値観が欠如していることによって、ポピュリズムは、パーソナリティの政治にとくに依存するようになってい…よって、多くのポピュリズムのリーダーシップは、カリスマ的である」（Taggart, 2000:101）。また大嶽は、ラテンアメリカのポピュリズムが、「通常、アルゼンチンのペロンやブラジルのヴァルガスなど個人的カリスマを持つ指導者、政治的ヒーローが扇情的なスローガンあるいは（無責任な）大衆迎合的政策を利用して大衆動員をはかる、上からの運動と定義される」（大嶽2003:111-112）とし、やはり「個人的カリスマを持つ指導者」をその重要な要素として位置づけている。

上記のようなカリスマ的指導者が彼らを支持する「人々」との間で「直接的な」つながりをもつのも、ポピュリズムの特徴の一つとして挙げられる。ポピュリズムの古典的研究でカノヴァンは、ポピュリズムが「代表制政治の制度を信用せず、イニシアチブや国民投票、リコールといった、代表者の役割をバイパスするメカニズムを導入しようとする」（Canovan 1981:177）と述べているし、ラテンアメリカのポピュリズムを研究したウェイランドは、ポピュリズムを「ほとんど組織されていない多数の支持者からの、直接的で、無媒介で、制度化されない支持により、個人的な指導者が、政府の権力を追求したり、行使したりする、政治的な戦略」（Weyland 2001、強調は筆者）であるという。また村上佑介は、「強い指導力を持った——別の観点からすれば独善的な志向の強い大統領が、国会や政党、労働組合等による社会運動など、大統領と一般の人々を媒介する役割を担う機構や組織を介さずに、個々の人々と直接に感情的・心情的な繋がりを構築し、支持を調達しながら実施」（村上2018:19、強調は筆者）するものが現代のポピュリストであると述べている。

さらに水島は、ポピュリズムの共同研究のなかでより直接的に、このポピュリズムを「中抜き」という言葉で表現している。すなわち、「既存団体や主流派メディアという『中』を抜いた、いわば『中抜き』という手法が、現代のポピュリズムにおける政治コミュニケーションの特徴となっているように見える」とし、日本及び欧州諸国の政治におけるポピュリズムを、「中間団体」の衰退とメディアの変容を通じて検証している（水島2020）。同様に、ロザンヴァロンの著書『良き統治』の邦訳を解説した宇野重規も同様に、「ポピュリズム政治家の多くは、伝統的な政党組織を『中抜き』にして直接有権者に訴えかけるこ

とを特徴としている」（宇野2020：iii）と述べている。

2. ポピュリズムにおける諸特徴の固有性

前節では、現代ポピュリズムにみられる特徴を先行研究に基づいて整理した。しかし、それらのポピュリズムの特徴とされる諸点がポピュリズムだけに特有のものなのか、あるいはそれらはすべてのポピュリズムと呼ばれる現象に共通してみられるものなのか。本節では、上記の諸特徴を検証していくことにする。

支持調達的手法

まず、「支持調達的手法」として挙げられている特徴はどの程度、ポピュリズムに固有のものであるといえるであろうか。最初の「『人々』を中心に据えていること」については、ポピュリズムというよりはむしろ「民主主義」の主要な要素の一つであると指摘することに異論はないだろう。「人々による支配」を意味する「民主主義（democracy）」はまさにその語源のとおり、「人々」を中心に据えている。もっとも、古くはプラトンが「民主主義」の問題を指摘して「哲人王」による支配を示したように、また近年ではヒトラーのナチスが混乱するワイマール共和制から民衆の支持を得て台頭してきたように、「人々による支配」としての民主主義への危惧とそれに対抗する指導者やエリートの支配を正当化する議論も繰り返して現れてきた。

しかし、戦後アメリカを中心に発展してきた政治学は、とくにナチス・ドイツの失敗も踏まえて、民主主義を「人民主権」と「権力分立」の組み合わせとして捉えてきたといえる。その最たるものが、ダールの『ポリアーキー』（Dahl 1971=2014）であろう。「包摂」すなわちすべての人々に保証された政治参加と、「公的異議申し立て」すなわち言論・結社等の自由に裏付けられた権力への牽制という二つの要素によって構成されるこの現代民主主義の理論的構想は、彼の原著『民主主義理論の基礎』（Dahl 1956）をみるとその理論構築の過程がよくわかる。そこでは、「権力分立」をその最大の特徴とする「マジソン主義デモクラシー」と、すべての人々の参加による「人民主義デモクラシー」との組み合わせによって現代民主主義を理論的に構築している。つまり、「『人々』を中心に据えている」ことは、現代民主主義にとっても中心的な要素の一つであるということにほかならない。これを念頭に置いたとき、ポピュリストの第一の特徴は、ポピュリズムの特徴というよりはむしろ民主主義そのものの特徴であり、ゆえに、ポピュリズムを「問題視」する際には、民主主義を批判することにもなりかねないというジレンマに陥ることになる。いずれにせよ、この特徴がポピュリズムだけに備わっているものとはいえない。

また、「敵／味方」の二分による対立の強調についても、それがポピュリズムに特有のものであるとは言い難い。中谷義和によれば、多くの論者が現代のポピュリズムに「シュミットの『政治神学』の残像を読み取っている」という（中谷2017：21）。ナチス・ドイツ時代にヒトラーの独裁を擁護したといわれる思想家カール・シュミットは、政治を「友／敵」の関係として捉えた「友／敵理論」で有名だが（シュミット1925=1970とくに14）、ポピュリズムにおける「敵／味方」の二分による対立の強調はまさにそれを彷彿とさせるものであるという。すなわちこの特徴は、シュミットの議論にしたがえば、ポピュリズムの特徴というよりは、「政治的なるもの」すなわち「政治そのもの」であるということになる。

イデオロギー・理念

ところでこのシュミットの「友／敵理論」は戦後、フランス現代思想の影響も受けて別のかたちで現れ

ている。それがラクラウとムフによる「闘技民主主義」の理論である（ラクラウ、ムフ2012）。闘技民主主義の理論は、それまでのコンセンサスへの到達を重視する民主主義理論に対して、永続する「敵対性」を重視する。この「敵対性」を民主主義の中心に置いている点でシュミットを「継承」していることは、彼らの主著のなかに『政治的なるものの再興』（Mouffe 1993=1998）や『政治的なるものについて』（ムフ2008）といったものがあることにも現れている。

そしてその闘技民主主義の延長上に示されるのが、ムフの「左派ポピュリズム」である（ムフ2019）。このムフの左派ポピュリズム構想は、新自由主義経済と巨大資本の台頭に抗して、経済格差への反対や市民参加を訴える「左派」からのポピュリズム戦略を提唱するものである。西欧や北米で多くみられるポピュリズムが、自国民中心主義や排外主義といった「右派」ポピュリズムであることから、こうした主張に批判的な論者は、ポピュリズムを問題とみなす傾向が強い。しかし、この「左派ポピュリズム」に典型的にみられるように、ポピュリズムそのものが主張するイデオロギーや理念にはむしろそれとは逆の主張も含まれる。ここでもポピュリズムにおけるイデオロギー・理念の「多様性」が現れているといえるが、逆に言えば、これといった特定のイデオロギーを持たないことが、イデオロギー・理念の点からポピュリズムの特定を不可能にしているともいえる。

もっともその結果として、ムフやラクラウのように、市民参加や直接民主主義を支持する論者が、右派ポピュリストの主張するアイデンティティ政治には反対でも、この「左派ポピュリズム」を念頭にポピュリズムに民主主義の可能性を見いだすこともある（山口2010）。このように、理念・イデオロギーの多様性ないしは曖昧さゆえに、ポピュリズムは民主主義に接近する契機も兼ね備えている²。このことは、ポピュリズムの「反多元主義」「反自由主義」を理由に、その非民主性を批判する論者との間で鋭く対抗することにもなりかねず、このことがポピュリズムの理論と実践の困難さを示しているともいえる。

指導者と支持者の関係

次に「指導者と支持者の関係」における特徴についてみると、まず「カリスマ的政治指導者の存在」については、これもポピュリズムにだけみられる特徴ではなく、またポピュリズムには必ずしもカリスマ的指導者がいるとも限らない。まず、ポピュリズムの「発祥」ともされる、1892年に創設されたアメリカ人民党、通称「ポピュリスト党」は、19世紀末の急速な工業化のなかで取り残されつつあった農民の利益を代表する農民運動をその始まりとし、一時的とはいえアメリカの伝統的な二大政党制において有力な第三勢力を形成したが、この政党に後世にまで名の残るカリスマ的な指導者が存在したかといえばそうではない（吉田2011：86-87）。

その後、20世紀中頃に相次いで登場したラテンアメリカのポピュリズムには、個性的で国民から強い支持を受けたカリスマ的指導者が存在したし、また20世紀末からヨーロッパ各国で台頭したポピュリスト政党には、その「創業者」であるカリスマ的指導者がいた。しかしそのなかでも、例えばベルギーの地域政党として登場したフラームス・ブロックは、ヨーロッパのなかでも「老舗のポピュリズム政党」（水島2016：80）であるといわれるが、フランス国民戦線のルペンやオーストリア自由党のハイダーのような個性の強い指導者がいるわけではなかった。このように、ポピュリズムやポピュリスト政党の多くにカリスマ的指導者が存在するものの、どの事例にも必ずみられるというわけではやはりないのである。

このことはポピュリスト政党に関していうと、かつて筆者が開発途上国の新興民主主義国を念頭に検証した「個人政党」の特徴と著しく類似する（金丸2014）³。その研究で筆者が指摘した「個人政党」のきわだった組織的特徴とは、政党が指導者に従属しており指導者が政党内で圧倒的な影響力を持つ一方で、その指

導者と支持者の関係が直接的でそれらを媒介する団体はもとより政党内の組織すら脆弱か不在であるということであった。ポピュリズムには必ずしもカリスマ的指導者がいるわけではないことは先ほど指摘したが、その多くには強いリーダーシップを発揮する指導者が存在する。とりわけ、ヨーロッパの極右政党にみられるポピュリスト政党では、その主張内容が新しい（そして多くの場合は極端である）ため、伝統的な既成政党とは一線を画した新型政党として登場する。その際には、その新興政党の「創業者」として強い指導力を発揮する指導者が存在し、その政党は「創業者」としての指導者の「個人政党」となっている場合が多い。また、指導者と有権者ないしは支持者との関係は、「中抜き」とも呼ばれるように、その間に中間団体や中間組織を介さず「直接的」な繋がりを持つ場合が多く、さらに近年発達してきたインターネットやSNSといった新しいメディアがそれに大きく助力している場合も少なくない（水島2020）。

なおポピュリズムの場合は、こうした個人政党を必ずしも介しないケースもある。つまり、アメリカやフランス、ラテンアメリカ諸国といった大統領制の国でみられるポピュリズム、あるいは日本の地方自治体でみられるポピュリズムの場合、指導者は国民・有権者による直接投票で選出されるため、国民・有権者は必ずしも政党を介さずに、その国や自治体の指導者を直接支持し、また指導者は支持者に直接訴えかけることができる。他方、近年では首相の選出を議会内での政党勢力に依存する議院内閣制においても、首相個人の指導力やときにその人格（カリスマ）が問われることがある。このように、執政制度あるいは選挙過程がより大統領制的になっていく民主政治の傾向を、ポグントケとウェブは「大統領制化（presidentialization）」と呼び、その後、多くの国でこの「大統領制化」の傾向が見いだされている（Poguntke and Webb eds. 2005=2014、岩崎編2019）⁴。このように、強いリーダーと支持者・国民との直接的繋がり、この「大統領制化」の議論（とりわけその選挙過程の議論）に換言することもできる。

3. ポピュリズムの「問題点」

ここまで、まずポピュリズムの先行研究から現代ポピュリズムにみられる特徴を洗い出し、次にそれらの特徴がポピュリズムに固有のものではなく、類似するほかの政治学的な議論の中でも見られることを指摘した。ここでは、それらの議論を踏まえて、今日「問題」とされているポピュリズムのどこが「問題」なのかを検証する。その際、ポピュリズムの諸特徴がこれまで論じられてきたほかの政治学の問題のなかでも論じられうることから、それら政治学の議論のなかでその「問題」が定位されることに着目したい。

支持調達的手法

まず支持調達の手法のなかでとくにポピュリズムが「人々」を中心に据えている点について、それはむしろ民主主義の主要な一要素であると述べた。ところが他方で、ポピュリズムがその一要素つまり「人民民主主義」のみを強調するようであれば、逆に現代民主主義のもう一つの要素である「権力分立」ないしは政治的自由をないがしろにすることになりかねない。実は、ポピュリズムが民主主義に反するものと捉える議論はこの点を強調しているといえる。例えばミュラーは、「ポピュリストはつねに反多元主義者（antipluralist）である」（ミュラー 2017：4、強調は原文）と断言し、ミュデとカルトワッセルは「デモクラシーと自由主義（リベラリズム）が支配的な世界においては、ポピュリズムはどうしても非民主的な自由主義に対する非リベラルな民主的反応となる」（ミュデ、カルトワッセル2018：173、強調は金丸）と述べることで、ポピュリズムは「多元主義」すなわち反対意見や少数派の意思を尊重する現代民主主義の重要な要素を無視ないしは軽視しがちであると批判している。

また他方で、「敵／味方」の二分法については、そのロジックにより社会を「分断」して「対立」を煽り、

結果、異質な民族や集団を排除するといった問題を引き起こすことが指摘される。ポピュリズムといった政治現象がしばしば、政治学者のみならずジャーナリズムや一般の政治的議論のなかで問題視される際には、この点が問題とされることが多い。

イデオロギー・理念

この「社会の分断」を深めその「対立」を煽るという問題点は、自国民中心主義や自民族（人種）中心主義、排外主義といった「アイデンティティ政治」の問題においてより深刻になるといえる。ポピュリズムのなかでもいわゆる「極右」のポピュリズムがしばしば問題視されるのはこのためである。それは、「アイデンティティ政治」すなわち民族や国籍といった属性の違いに基づいて分断が深刻化し、さらにその対立が激化していくと強度の高い紛争になりかねないからである。筆者は民族問題を取り上げた論考の中で、アイデンティティは「変更が不可能」であり「妥協が困難」なため、アイデンティティをめぐる対立・紛争は存在を賭けたものとなり限りなく激化する性質があると論じた（金丸2012）。同じ政治対立でも、このように妥協可能性が低く、命がけの戦いになりやすい対立は回避すべきであり、こうした政治的リスクの高い主義主張によって政治的支持調達を図るタイプのポピュリズムは問題とされるのである。

指導者と支持者の関係

最後に「指導者と支持者の関係」でみられる特徴は、個人政党と大統領制化の議論に沿って考えることができ、よってそこで指摘される問題点も個人政党と大統領制化の抱える問題とあわせて論じることができる。まず個人政党が抱える問題として組織としての持続性・安定性の問題がある（金丸2014：69-71）。ポピュリスト政党は個人政党と同様、しばしばカリスマ的な強い指導力を持つ「創業者」としての指導者に依存しすぎると、その指導者の変化や消滅によってポピュリスト政党そのものも存在できなくなる可能性が高い。とりわけ「カリスマは本質的に不安定であり、日常的な運営の必要から早晚排除されてしまう」（Panbianco 1988=2005：166）ことが多いために、せいぜい一代限りで終わる可能性が高い。

この問題は、途上国政治では政党および政党システムの「制度化」の問題として論じられてきた点である（Randall and Svasand 2001, Mainwaring and Torcal 2005）。すなわち、新興政党がいかに指導者個人による支配と「中抜き」の組織構造から脱し、組織を形成してシステムとして確立していくかといった政党の「制度化」が、その政党の安定性と持続可能性につながるという議論である。このことは、個人政党に類似するポピュリズムにおいてもいえることで、新興のポピュリスト政党の場合であれば、それがいかに個人支配を脱し、組織を確立していくかということが、その政党としての持続性と安定性につながると考えられる。

この持続性・安定性の問題は、タッグートのポピュリズム研究においても強調されている。すなわちタッグートは、「制度化された代表制政治としての政党政治に抗するために、ポピュリズムは登場する。しかし、ポピュリズムも、支持者動員のために制度化を余儀なくされ、制度化への道を進むことで、（制度化の進んだ既存政党に抗するという）その当初の目的に反するというジレンマが生まれる」（Taggart, 2000：100、強調は筆者）という。

また、大統領制においてはポピュリズムの場合は問題がさらに深刻になる可能性が高い。それは、そのポピュリズムとしての持続性や安定性が、政治体制そのものの持続性や安定性につながる可能性が高いからである。「大統領制化」の研究においてウェブらは「大統領制化した執政府長や党首は、政党主導政治

時代の彼らよりも脆弱である」という。というのも、大統領制化した指導者は、「ひとえに個人的人気によってリーダーシップを発揮しているため、うつろいやすい世論の変化に影響されやすい」（Webb and Poguntke 2005=2014：501）ためであるという。実は、ポグントケらは各国（主に欧米先進国）における政治の「大統領制化」を必ずしも否定的に（つまりは「問題」として）捉えているわけではない。そこには、政治指導者と国民との直接的つながりによる肯定的な側面もあるという（この点はポピュリズムを擁護する見解に似ている）。ただ、ここで指摘されているような「脆弱性」については、その否定的な側面すなわち「問題点」であるといわざるを得ないであろう。

しかし、政党組織発展論は、こうした個人政党が必然的に消滅あるいは衰退するとは論じていない。今日の多くの既成政党がそうであるように、新しく登場した政党は次第に「制度化」を経て、安定した組織を形成する。実は今日の欧州などでみられるポピュリスト政党のなかにも、こうした「制度化」を経て、各国の政治において「主流化」してきているという議論も存在する。欧州ポピュリズム研究のなかで古賀光生は、イタリアの北部同盟やオーストリア自由党、デンマーク国民党、オランダのフォルタイン党などの急進右派政党が、「従来のポピュリスト的な動員手法を維持しつつも、並行して、党の制度化や支持者の組織化を進めて」おり、同時に「支持層の固定化も見受けられる」（古賀2020：11）と述べ、欧州におけるポピュリスト政党の「主流化」を指摘している⁵。古賀はまた、「これらの党は登場初期には、『カリスマ的』指導者に依存した。しかし、これは新興政党が発生期に「政治的な起業家（political entrepreneur）」に依存する傾向の一環であり、ポピュリストに固有の特徴ではない」とも述べ、一般的に政党が発展するにしたがって組織の「制度化」が進むことが理論的にわかっていることから、新興政党としての欧州ポピュリスト政党にも「地方支部の整備や党員組織の拡大とその統制の強化、党主導での傘下団体の整備など」の「制度化」が進んできていることを指摘している（古賀2020：11）。あわせていうなら、欧州の極右ポピュリスト政党で最も成功したといえるフランス国民戦線は、そのカリスマ的「創業者」のジャン＝マリ・ルペンから長女のマリーヌ・ルペンに党首が交代することで指導者の引き継ぎに成功した（畑山2013）。この国民戦線のマリーヌは、マクロンが当選した2017年のフランス大統領選挙で決選投票まで残っている。

おわりに

本稿では最初にポピュリズムを「定義」することの困難さを指摘し、ポピュリズムを「シンドローム」と捉えることで「支持調達的手法」、「イデオロギー・理念」、「指導者と支持者の関係」に関わるいくつかの特徴を列挙した。それを踏まえて次に、それらの特徴はすべてのポピュリズム現象が持っているものでもなければ、一つ一つの点を取り上げてもそれがポピュリズムのみに固有なものでもないということを目指した。例えば、ポピュリストが「人々」を中心に据えている点ではそれはむしろ現代民主主義の議論に還元できること、また指導者と支持者の間の直接的な関係については個人政党や大統領制化の議論で論じられていることといった点である。そして最後に、これらのポピュリズムと重なる政治学の諸論点から、ポピュリズムの何が「問題」なのかを指摘した。

本稿を締めくくるにあたって最後に、冒頭でも指摘したポピュリズムと民主主義との背反ないしはジレンマについて触れておきたい。ポピュリズムをめぐる理論的困難は、本稿で指摘したその「定義の困難さ」だけでなく、より根源的にはポピュリズムが現代の（自由）民主主義に反するものか否かといった点でも指摘される。しかし本稿での検討からわかるのは、例えば支持調達の方法をめぐる問題になっているのは、ポピュリズムに広くみられる支持調達の方法そのものではなく、「人民主義」を強調するあまり、「多元主義」や「自由主義」的な民主主義の側面がないがしろにされるということであるし、また「敵／味方」

の二分を強調するあまり、人々の間での「分断」を深め「統合」や「協調」を阻害するといった点に集約される。また、イデオロギー・理念をめぐることは、そもそも多様なイデオロギーや主張があるなかで、とくに批判の対象とされる民族主義や排外主義といった主張が問題なのであり、それは、ポピュリズムの問題というよりは、その多様性を排除する理念や主張の問題に還元される。さらにポピュリズムにおける指導者と支持者との、しばしば指導者のカリスマ性に裏付けられた直接的な関係は必ずしも否定的な面ばかりではないが、その持続可能性や安定性の面では問題が指摘される。しかしこれも個人政党や政党組織論あるいは大統領制化の議論のなかで指摘されてきたことに他ならない⁶。

したがって、ポピュリズムが「問題」とされるとき、例えばそれが自由民主主義に反するので問題であるというときには、その問題はより限定的に多元主義や自由主義の問題であると定位できるし、そのアイデンティティ政治の主張が問題であるというときには民族主義や排外主義など多様性の排除の問題に集約されていく。また政党や体制の安定性や持続可能性に問題があるという際にもその制度化や組織構築の問題に集約されていくのではなからうか。ポピュリズムを批判するにしても擁護するにしても、このように論点を整理していくことが、有益な議論につながるのではないかと、筆者は考える。

註

- 1 ポピュリズムを「シンドローム」として捉える見方は、すでにポピュリズムの古典的研究として有名なイオネスクとゲルナーの共同研究 (Ionescu and Gellner eds. 1969) におけるピーター・ワイルズの論考でも指摘されている (Wiles 1969)。またタグガーは「カノヴァンは、ポピュリズムの7つのカテゴリーを示しながら、ポピュリズムには中心となるもの (core) が見いだせないこと、それどころかむしろ数多くの異なる症候群 (シンドローム) を特定することができることを指摘した」(Taggart, 2000: 20) と述べている。
- 2 池本大輔はEUにおけるポピュリズム台頭の検証に先駆けてポピュリズムの先行研究を検討するなかで、ポピュリズムはデモクラシーを損ねる面と活性化する面との両面があるが、活性化する面に力点を置く議論として水島治郎の『ポピュリズムとは何か』を挙げている (池本2018: 18)。
- 3 マウロ・カリーゼの著書『個人政党 (Il Partito Personale: The Personal Party)』(邦訳は『政党支配の終焉』) は、著者がイタリア人であることもあり、その書き出しをかつてのイタリアの新興政党「北部同盟」のカリスマ的指導者シルヴィオ・ベルルスコーニの話から始めている。このベルルスコーニの新党「北部同盟」は、のちに政権を与かるまでにいった言わずと知れたポピュリスト政党で、本書でカリーゼは、イタリアの事例を念頭に、ヨーロッパなどで台頭するポピュリストと個人政党の台頭、そしてその背後にある既成政党の衰退と社会の変化について書いている (カリーゼ2016)。
- 4 例えば、伝統的な議院内閣制の国であるイギリスでも、「大統領制化」の進展が指摘されている (Heffernan and Webb 2005、三澤2019)。また、ポグントケらが「大統領制化」を発表する以前に坂野は、イギリス議会政党における「人民投票の政党化」を指摘している (坂野2001)。
- 5 あわせて古賀は、西欧の多くの諸国で、「既成政党の『ポピュリズム化』」が進展している点も指摘している (古賀2020: 16)。アメリカにおける「共和党のトランプ化」や「小泉自民党」を考えるとこれも興味深い論点だが、本稿の議論に沿っていると、この点は既成政党の「大統領制化」であるということができよう。既成政党、とりわけ政権獲得の可能性がある政党は、「大統領制化」を進めることで政権獲得をめざし、また政権運営も行う傾向が強くなっている。
- 6 権威主義体制の研究で有名なレビツキーはジブラットとの著作で、民主主義の「門番 (gatekeeper)」としての政党の重要性に着目している (レビツキー、ジブラット2018: 40)。その背景には、アメリカにおける二大政党の両極化そしてポピュリストとしてのトランプ大統領の登場によるアメリカ民主主義に対する危機感がある。

文献リスト

<外国語文献>

- Canovan, Margaret, 1981, *Populism*, London: Junction.
- Calise, Mauro, 2010, *Il Partito Personale: I Due Corpi del Leader*, Laterza: Roma-Bari.カリーゼ (2016) 村上信一郎訳『政党支配の終焉: カリスマなき指導者の時代』法政大学出版社。
- Dahl, Robert A., 1971, *Polyarchy: Participation and opposition*, New Haven: Yale University Press. ダール (2014) 高島通敏、前田脩訳『ポリアーキー』岩波文庫。
- Dahl, Robert A., 1956, *A Preface to Democratic Theory*, University of Chicago Press. ダール (1970) 内山秀夫訳『民主主義理論の基礎』未来社。
- Heffernan, Richard and Webb, Paul, 2005, "The British Prime Minister: Much More Than 'First Among Equals,'" in Poguntke and Webb eds. 2005: Ch. 2. ヘフェーナン、ウェブ (2014) 「イギリスの首相: もはや『同輩中の首席』ではない」ポグントケ、ウェ

ブ編（2014）：第2章。

- Ionescu, Ghita and Gellner, Ernest eds., 1969, *Populism: Its Meaning and National Characteristics*, London: Macmillan, pp. 163-179.
- Kitschelt, Herbert and Wilkinson, Steven I. eds., 2007, *Patrons, Clients, and Policies: Patterns of Democratic Accountability and Political Competition*, Cambridge: Cambridge University Press: Ch. 1.
- Laclau, Ernesto and Mouffe, Chantal, 1985, *Hegemony and Socialist Strategy: Towards a Radical Democratic Politics*, London and New York: Verso. ラクラウ、ムフ（2012）西永亮、千葉真訳『民主主義の革命：ヘゲモニーとポスト・マルクス主義』ちくま学芸文庫。
- Levitsky, Steven and Ziblatt, Daniel, 2018, *How Democracies Die: What History Reveals about our Future*, New York: VIKING. レビツキー、ジブラット（2018）濱野大道訳『民主主義の死に方：二極化する政治が招く独裁への道』新潮社。
- Mainwaring, Scott and Torcal, Mariano, 2005, "Party System Institutionalization and Party System Theory after the Third Wave of Democratization," Kellogg Institute, Working Paper #319-April 2005.
- Mouffe, Chantal, 2018, *For A Left Populism*, London: Verso. ムフ（2019）山本圭、塩田潤訳『左派ポピュリズムのために』明石書店。
- Mouffe, Chantal, 2005, *On The Political*, New York: Routledge. ムフ（2008）酒井隆史監訳、篠原雅武訳『政治的なものについて：闘技民主主義と多元主義的グローバル秩序の構築』明石書店。
- Mouffe, Chantal, 1993, *The Return of the Political*, London: Verso. ムフ（1988）千葉真・土井美徳・田中智彦・山田竜作訳『政治的なものの再興』日本経済評論社。
- Mounk, Yascha, 2018, *The People vs. Democracy: Why Our Freedom Is in Danger and How to Save It*, Cambridge Mass.: Harvard University Press. モンク（2019）吉田徹訳『民主主義を救え！』岩波書店。
- Mudde, Cas and Kaltwasser, Cristobal Rovia, 2017, *Populism: A Very Short Introduction*, Oxford: Oxford University Press. ミュデ、カルトワッセル（2018）永井大輔、高山裕二訳『ポピュリズム：デモクラシーの友と敵』白水社。
- Muller, Jan-Werner, 2016, *What Is Populism?* Philadelphia: University of Pennsylvania Press. ミュラー（2017）板橋拓巳訳『ポピュリズムとは何か』岩波書店。
- Panebianco, Angelo, 1988, *Political Parties: Organizations and Power*, Cambridge: Cambridge University Press. パーネビアンコ（2005）村上信一郎訳『政党：組織と権力』ミネルヴァ書房。
- Poguntke, Thomas and Webb, Paul eds., 2005, *The Presidentialization of Politics: A Comparative Study of Modern Democracies*, Oxford: Oxford University Press. ポグントケ、ウェブ編（2014）岩崎正洋監訳『民主政治はなぜ「大統領制化」するのか：現代民主主義国家の比較研究』ミネルヴァ書房。
- Randall, Vicky and Svasand, Lars, 2001, "Party Institutionalization and the New Democracies", in Haynes, Jeff ed., 2001, *Democracy and Political Change in the "Third World"*, London and New York: Routledge: Ch. 5.
- Rosanvallon, Pierre, 2015, *Le Bon Gouvernement*. Seuil. ロザンヴァロン（2020）古城毅、赤羽悠、安藤裕介、稲永祐介、永見瑞木、中村督、解説：宇野重規『良き統治：大統領制化する民主主義』みすず書房。
- Schmitt, Carl, 1925, *Der Begriff des Politischen*, Munchen: Dunker and Humblot. シュミット（1970）田中浩・原田武雄訳『政治的なものの概念』未來社。
- Taggart, Paul, 2000, *Populism*, Buckingham: Open University Press.
- Webb, Paul and Poguntke, Thomas, 2005, "The Presidentialization of Contemporary Democratic Politics: Evidence, Causes, and Consequences," in Poguntke and Webb eds. 2005: Ch. 15. ウェブ、ポグントケ「現代民主政治の大統領制化：証拠、原因、結果」ポグントケ、ウェブ編（2014）：第15章。
- Weyland, Kurt, 2001, "Clarifying a Contested Concept: Populism in the Study of Latin American Politics," *Comparative Politics*, Vol. 34, pp. 1-22.
- Wiles, Peter, "A Syndrome, not a Doctrine: Some Elementary Theses on Populism," in Ionescu, Ghita and Gellner, Ernest eds., 1969, *Populism: Its Meaning and National Characteristics*, London: Macmillan, pp. 163-179.

<日本語文献>

- 池本大輔（2018）「ポピュリズムの挑戦とEU」佐々木編2018：第1章。
- 岩崎正洋編（2019）『大統領制化の比較政治学』ミネルヴァ書房。
- 宇野重規（2020）『「良き統治」とは何か』ロザンヴァロン2020「解説」。
- 大澤傑（2020）『独裁が揺らぐとき：個人支配体制の比較政治』ミネルヴァ書房。
- 大嶽秀夫（2003）『日本型ポピュリズム：政治への期待と幻滅』中公新書。
- 金丸裕志（2019）「権威主義体制論の興隆と政治体制の分類枠組み」『和洋女子大学紀要』第60集、23-33頁。
- 金丸裕志（2014）「開発途上国における個人政党とその問題：途上国の政党政治と民主主義の定着への示唆」『和洋女子大学紀要』第54集、103～116頁。
- 金丸裕志（2012）「多民族社会と民族政党：民族政治をこえて」『和洋女子大学紀要』第52集、71-81頁。
- 河田潤一編（2008）『汚職・腐敗・クライエンテリズムの政治学』ミネルヴァ書房。
- 古賀光生（2020）『「主流化」するポピュリズム？：西欧の右翼ポピュリズムを中心に』水島編2020：第1章。
- 坂野智一（2001）「イギリスにおける政党組織の変容：党組織改革と人民投票の政党への動き」『国際文化学研究』第16号、15-56頁。
- 佐々木毅編（2018）『民主政とポピュリズム：ヨーロッパ・アメリカ・日本の比較政治学』筑摩書房。
- 高橋進・石田徹編（2013）『ポピュリズム時代のデモクラシー：ヨーロッパからの考察』法律文化社。

- ・玉田芳史（2009）「タイのポピュリズムと民主化：タックシン政権の衆望と汚名」島田幸典、木村幹編（2009）『ポピュリズム・民主主義・政治指導：制度的変動期の比較政治学』ミネルヴァ書房：第4章。
- ・中谷義和（2017）「ポピュリズムの政治空間」中谷義和ほか編2017：第1章。
- ・中谷義和ほか編（2017）『ポピュリズムのグローバル化を問う：揺らぐ民主主義のゆくえ』法律文化社。
- ・畑山敏夫（2013）「マリーヌ・ルペンと新しい国民戦線」：高橋・石田編2013：第5章。
- ・三澤真明（2019）「ブレア後のイギリス：大統領制化は続いているのか？」岩崎編2019：第2章。
- ・水島治郎（2020）「中間団体の衰退とメディアの変容：『中抜き』時代のポピュリズム」水島編2020：第2章。
- ・水島治郎編（2020）『ポピュリズムという挑戦：岐路に立つ現代デモクラシー』岩波書店。
- ・水島治郎（2016）『ポピュリズムとは何か：民主主義の敵か、改革の希望か』中公新書。
- ・村上佑介編（2018）『「ポピュリズム」の政治学：深まる政治社会の亀裂と権威主義化』国際書院。
- ・山口二郎（2010）『ポピュリズムへの反撃：現代民主主義復活の条件』角川ONEテーマ21。
- ・吉田徹（2011）『ポピュリズムを考える：民主主義への再入門』NHK出版。

金丸 裕志（和洋女子大学 国際学部 国際学科 教授）

（2021年10月12日受理）